

平成29年10月2日(月)

老球の細道360号

## 9月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

今月は車と身体のメンテナンスがあった。特に人間ドックでは、昨年「食道がん疑い」で生まれて初めて生検検査(異状なし)を受けたから、今年は二度とないことを念じて入念に準備をして臨んだ。何事も「成功は準備から」。もしまた同じような診断が下され、本当に病気になっていたら、「病気になっても“病人”にならない」「人生をリセットするチャンスととらえる」「病気は、特殊な状態ではない」を今月のテーマとした。その結果、ここ数年の人間ドックでは初の「要精検」無しで無事生還。やはり準備である。

### 1・テレビ番組から

◆「人、賢愚ありといえども、各々1.2の才能なきはなし」〈番組名忘却『吉田松陰』〉

吉田松陰は尊敬する人物の一人である。会津の宿敵長州人であるが、その情熱と行動力、には敬服せざるをえない。危険思想を持っているということで故郷萩の牢屋に入れられたことがある。その時多くの囚人たち、牢番までを松陰の心酔者にしてしまったという。それは松陰が身分に関係なく相手をリスペクトし、相手の長所を評価したところによる。

### 2・読書から

◆「生の生たるゆえんは、固定化するものをたえず打ち破り、自己自身とその限界をこえる自己超克の運動にある」〈山崎庸佑著『人類の知的遺産・ニーチェ』〉

脱皮することのできない蛇は滅びる。現状維持のぬるま湯に浸る人生はただ死を待つだけの退屈な時間となる。退屈な時間は人生を蝕む。自分自身にちょっと困難な課題を与えチャレンジしたい。錆びつく人生より、擦り切れる人生を(ナンチャッテ)。

### 3・新聞のコラム等から

◆「テレビを観ないプロフェッショナルはいても、本を読まないプロフェッショナルはいない」〈工藤進英『逆境の中で咲く花は美しい』書籍広告より〉

バスケットボール、映画、そして読書から人生を学んだ。読書はエネルギーを必要とする。楽をして未知の世界は知りえない。読書で得た知識を行動に移す情熱を持ち続けたい。

◆「できるようになる唯一の方法は始めることだからね」〈朝日新聞・ひと・手足のない冒険家カイル・メイナードさん〉

中学校の「ワンハンドシュート講習会」でこの言葉を披露した。特に女子はできる、できないかは、まず試合で使ってみる。先日の新人戦ほぼ現状維持。始めの1歩が難しい。

◆「“まず先生が笑顔になりましょう”という“笑育”を」〈日本体育協会『スポーツ・ジャパン』〉

ある時気がついた。笑顔で真剣にバスケットボールの練習、試合に取り組んでいる子どもたちが少ないことを。窮地に陥った時に頼りになるのは、どんな世界でも指揮官の笑顔。

◆「自分の人生をどう歩むかは自由ですからね。ただ、僕は最初から世界のトップを目指していたから、日本にとどまるという感覚はなかった。チャンスがあれば、常に世界へ、というのは自然なことでした」〈朝日新聞・未来ノート・テニス錦織圭〉

目標がその人の実力を決定する。会津レベルで考える人と、世界レベルで考える人では、傾ける情熱と努力の差は歴然である。大きな目標、高い意識を与えるのは指導者の仕事。